

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520839

研究課題名(和文) つながる消費文化 啓蒙化する市場と集会的嗜好形成をめぐる

研究課題名(英文) Consumer Cultures are Connected: Enlightening Markets and Collective Taste Formation

研究代表者

眞嶋 史叙 (Majima, Shinobu)

学習院大学・経済学部・教授

研究者番号：90453498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでは、「消費文化史研究会」の開催を通じて、西洋史、経済史、英米文学などを横断した学際的な共同研究作業を行いつつ、プロジェクト構成員をそれぞれ単独執筆者とする「シリーズ消費文化史」発刊の準備を進めてきた。その成果として、まずシリーズ第一巻となる『欲望と消費の系譜』を2014年に刊行した。さらに、成果の一部は、国内外の研究者22名を集めて2014年に開催された、消費文化史国際シンポジウムにおいて、基調講演・自由論題報告の形式で発表された。以上のような国内外の最先端の研究者との交流と共同作業を通じて、消費文化史の研究成果の集約が進むとともに、新たな学問的課題の確認もなされた。

研究成果の概要(英文)：This project has been pursued collaboratively by scholars of Western History, Economic History and English Literature who are eager to cross over academic boundaries, particularly through our regularly-held research meetings on the History of Consumer Cultures, which is a new interdisciplinary area of studies. Those project members have been preparing their monographs for the History of Consumer Cultures Monograph Series, first of which was published in 2014 entitled Genealogies of Desire and Consumption. Part of the research outcome have also been made public through the international symposium held by our Forum for the History of Consumer Cultures in 2014, entitled Moving Around: People, Things and Consumer Cultures. Through such collaborations with cutting-edge scholars of the History of Consumer Cultures, we have had the opportunity to gather and share the research outcomes internationally, and also to locate further perspectives to interact and enhance this topic of research.

研究分野：西洋史

キーワード：消費文化史 西洋史 経済史 英米文学 国際研究者交流

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 国内の研究背景

過去 30 年の間、西洋史・社会経済史の分野では「消費史」「生活史」、英米文学の分野では「文化史」「精神史」というジャンルが発展してきた。これらの先駆的な研究は、それ以前の「経済史」「思想史」という大きな枠組みを超えるものとして注目されてきたが、歴史研究のあらたな枠組みを構築する過程で「近代化のグランドナラティブ」を回避する傾向にあった。本研究では、既存の歴史研究が立脚している存在論に再度注視し、経済史や思想史等を含め、既存の国内研究を統合する枠組みとして「消費文化史」の可能性を提示していくことを目指した。

#### (2) 国外の研究背景

欧米においても過去 30 年間の急速な学問領域の拡大とともに、マクロの議論をミクロの資料分析を用いて反証する研究が広がってきていた。だが近年の人文社会科学再編成の流れの中では、歴史的な問題意識の原点回帰とも読み取れるような「産業革命」「グローバル化」および「啓蒙思想」等の概念を再度提示する動きが進んできたことも確かである。本研究の問題関心と同様に、「消費」を中心に据えた年代横断的な研究や地域横断的な研究も多数みられるようになった。現代性を帯びた歴史を通じた枠組みづくりを検討する上でこれらを参考にしていくことを目論んだ。

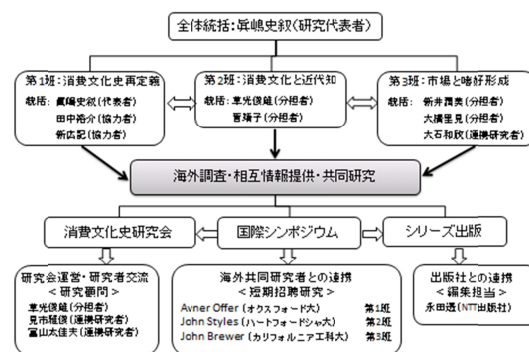
### 2. 研究の目的

本研究では、長期的構想の第 2 段階として、より広範囲な問題関心を取り込む形で、よりグローバルな研究枠組みとネットワークへと発展させたいと考えた。経済のグローバル化の進展とともに、欧米起源の個人主義的競争主義が享受されてきた反面、西洋中心主義的な世界観・歴史観に立脚した消費社会の捉え方には再考の余地がでてきたと思われた。本研究では、「集合知」枠組みが、実は日本や東洋に限らず、長期にわたる持続的な進歩・経済成長を考える上で鍵概念になるうとの認識のもと、その動因としての「集合的嗜好」形成過程を分析することこそが、進歩のダイナミクスの解明につながると考え、「消費文化」の役割を再確認していくことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、調査・分析をテーマごとに分担し、理論面では各研究者の議論を有機的に組み合わせる共同作業を展開するだけでなく、さらに広く国際研究協力体制を確立することを目指し、国際シンポジウムを再度開催することを中心目標の一つに据えて、海外研究連携者の短期招聘受け入れ態勢の整備を行ってきた。まず、前研究にて開始した単行本刊行の流れを継続し、個別研究の進展を執筆報告の形で確認しつつ、適宜に検証を行った。

平成 25 年度には、前回の国際シンポジウムから派生した『シリーズ消費文化史 欲望と消費の系譜』の執筆編集が集中的に進められ、一方で、それぞれが研究成果のディセミネーションを進めたが、それは国際シンポジウムでの成果を受けて各方面から発表・執筆依頼が舞い込むようになっていたことが一因である。『欲望と消費の系譜』は、前回の国際シンポジウムの基調講演者であったジョン・ブルーア(カリフォルニア工科大学)、アヴナ・オフア(オクスフォード大学)、ジョン・スタイルズ(ハートフォードシャ大学)および草光俊雄(放送大学・研究分担者)の 4 論文に加え、一般公募で参加したイヴ・ローゼンハフト(リバプール大学)の新規執筆論文を収めたものである。英語から日本語への翻訳は、眞嶋(研究代表者)、大橋(研究分担者)、新(研究協力者)が担当した。



平成 26 年 9 月には、3 年間の本研究プロジェクトの最終年度という位置づけから、第 2 回国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムには、イギリスからフランク・トレントマン(ロンドン大学パークベック校)および合衆国よりエリカ・ラパポート(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)の 2 名の著名な研究者を招聘し、草光(研究分担者)を含め合計 3 名の基調講演者による講演を頂き、英米における最新の消費文化史研究の一端を国内外の研究者と共有することができた。その他自由公募により 9 か国からの 20 名の研究者が集い、総勢 23 名が消費文化史に関する報告を行った。前述の『欲望と消費の系譜』もこの第 2 回国際シンポジウムの開催にあわせて刊行され、反響を呼んだ。第 2 回国際シンポジウムの成果は、基調講演者・一般公募報告者の発表原稿を改稿・編集した論文集としてまとめ、平成 27 年 3 月に広く配布され、研究成果のディセミネーションが進められた。

### 4. 研究成果

本研究の具体的な研究成果の概要は、平成 27 年 3 月に刊行された論文集 Moving Around: People, Things and Practices in Consumer Culture のなかにまとめられている。以下に本研究構成員の研究成果に絞り、テーマごとの要点を列記する。

(1) 眞嶋(研究代表者)は、「ファッション」を切り口にイギリスにおける繊維/織物/服飾産業に関わる消費文化史を描いてきたが、本研究では、海外との関わりのなかでロンドンがファッションの最先端を産み出していった過程を検討した。これまでファッションといえばパリが想起されてきたが、そのファッションの都=パリという構図は17世紀後半のルイ14世時代に海外進出・産業振興でのキャッチアップが進む中で生まれた言説なのではないか。17世紀後半にパリで流行したスタイルは17世紀前半の清教徒革命以前のロンドンにすでに見られるものであった。第2回国際シンポジウムで行った“Voyage, vanity and vestiture: where does Englishness of English dress come from?”の報告では、ロンドンのファッションを産み出した立役者として画家ヴァン・ダイクとチャールズ1世、そして王妃ヘンリエッタ・マリアという外国人たちに注目し、国際化する宮廷と海外進出する貴族たちの審美眼に先進性を見だしている。17世紀初頭はイギリスにとって、海外進出が進み、植民地の原型がつけられていった時代である。16世紀にはアントワープとの取引に終始していたマーチャントアドヴェンチャラーズに替わって、17世紀に入りレヴァント会社や東インド会社が興隆した時代には、新しい繊維製品が流入した。この海外からの未曾有の刺激が、革新的にシンプルなファッションを産み出し、さらには海外から取り寄せた原材料を用いた輸入代替型工業化のプロトタイプをも産み出していくこととなった。



〔図：ロンドン港の輸入品内訳，London Port Book のデータより著者作成〕

(2) 草光(研究分担者)は、新たな研究課題として植物学の歴史的萌芽プロセスを俯瞰的に調査する研究に着手し、菅(後述)と共著で『ヨーロッパの歴史II 植物からみるヨーロッパの歴史』を執筆した。大航海時代のヨーロッパの世界進出にともない、植物学・博物学は新しい世界との出会いを驚異と好奇心で迎え、自然秩序の解釈にその知的努力を傾注したと草光は論じる。まず、オランダではチューリップマニアなどが起こり、植

物画が盛んに描かれ、植物学者や庭師が活躍したが、植物学は庭師らによる植物の分類法の確立がその基礎となって科学として成立することになった。次にイギリスではハンス・スローンやジョゼフ・バンクスなどが活躍し、植物学は経済発展とヨーロッパの更なる世界システム構築のなかで、言い換えれば商業社会と啓蒙主義との関係のなかで、独自の存在感を示し始めたという。草光の研究では、本研究の一つの鍵概念である「啓蒙主義」が重要な位置を占めるが、その批判的解釈は“人文主義者ピーター・パーク”や“ラスキンとモリス 中世主義と近代”、そして『欲望と消費の系譜』の序章として再録された「消費社会の成立と政治文化」にも表されており、より端的には『ヨーロッパの歴史I ヨーロッパ史の視点と方法』所収の文章にまとめられている。長い18世紀には人々の暮らしが大きく変化し、商業社会・消費社会は現世的な価値観を変革して、作法、教養といった近代固有の価値観を産み、19世紀にはそのアンチテーゼとして過去への関心が語られ、古代、中世、ルネサンスなどの文化を復興させようとする試みが活発に行われたと草光はみる。啓蒙主義のもたらした功罪については、平成26年9月の国際シンポジウム基調講演で披露された“Travels, the Enlightenment and Races”の他、“The Origins of Multi-culturalism: Enlightenment and Race”や『アフリカ世界の歴史と文化 ヨーロッパ世界との関わり』所収の文章でも取り上げられているが、博物学が産み出したアフリカの概念化について触れている。すなわち、ヨーロッパ啓蒙主義は宗教と古い因習を否定し相対的な文明観を近代的思考にもたらしたが、一方で歴史的段階論を唱え、未開社会から近代社会への歴史の進歩史観を定着させたという。その際アフリカは未開社会の典型として描かれるようになった。現在に至る消費社会に内在する西洋中心主義的な人種差別観を批判的に検討する内容として、草光史学の真骨頂をなす歴史観が垣間見られる研究であるといえよう。

(3) 新井(研究分担者)は、大衆啓蒙化の時代の旅行・観光・観劇の変化について、英文学者の視点からコミカルにクリティカルに分析・執筆を続け、精力的に各地で講演活動を行ってきた。現代における教養教育と文化継承のあり方については“イギリス文化と学校教育”、“サッチャーとイギリス文化”、“映像はDumbing Downか 文学作品とアダプテーション”などの講演を通じて、集団的嗜好形成の方向性について警鐘を鳴らすとともに、重層的に奥深いイギリス階級社会に対するコミカルで風刺に富んだ文化理解をディセミネートしてきた。まず観劇については、19世紀の都市部の中産階級に好まれたコメディ・オペラについて批評し、“イギリスの音楽劇 サヴォイ・オペラからミュ

ージカルへ”の流れを紹介しながら、その一方で、アメリカの黒人風刺劇が海を越えて入ってきた“19世紀イギリスにおける「ミンストレル・ショー」”についても批判的に論じ、イギリスにおける階級差別と人種差別の相互補完的で代替的な同質性を明らかにしている。前研究より継続して、上流階級の邸宅とそのライフスタイルや文化をより下層の階級が「消費」する観光のあり方を描写し続け、“イギリスのカントリーハウス観光と文学”のタイトルで講演し、19世紀初頭に執筆された小説『高慢と偏見』のなかにも現出するカントリーハウスの場としての特異性とその文化的で教養形成的な意義を“Pride and Prejudice and the Concept of ‘Culture in Japan’”において総合的にまとめている。大邸宅はまさにその中に階級社会の縮図を内包するものであるが、上流階級のライフスタイルを支える使用人たちとの関係を“イギリス文化と使用人”で描きつつ、かつての大邸宅の使用人が著した自伝『おだまり ローズ 子爵夫人付きメイドの回想』を翻訳・監修もしている。大邸宅の内側で上流階級の高慢な婦人に使えた堅固な使用人の半生が描かれる中で、20世紀前半の「古き良きイギリス」最後の時代が歴史的に浮かび上がってくる。同時代には、階級風刺に富んだ表面的な面白さを表現しつつも、その基底に消滅しつつある階級文化への悲しみと憧憬も描き込んだ女流作家がいたことは“バーバラ・ピムと「古き良きイギリス」”にて紹介している。第2回国際シンポジウムでは、日本でも翻訳のある『ボートの三人男』について“Travel and Comic Writing: Jerome K. Jerome's Three Men in a Boat”でそのコミカルな面白さと教養的なガイドブックとしての意義を論じ、19世紀末に演劇やジャーナリズムの隆盛により、歴史・伝統・文化の消費が進む中で、いかに風刺とコメディが階級社会における文化的消費者のアイデンティティをアンビバレントに醸成してきたか明らかにしている。

(4) 大橋(研究分担者)は、地方都市におけるカントリーハウスの財産および美術品のオークションに関して、18世紀のオークション広告や遺産目録などの一次資料を用いて調査研究を続けている。その成果は、“Auctioneers in Provincial Towns in England and Wales at the End of the Eighteenth Century”や“Passing on one's taste in life: the roles and effects of general auctions in spreading noble lifestyle in England in the eighteenth century”にまとめられている。イギリス社会の商業化とともに、さまざまな商品が流通始めただけでなく、どのような商品が品格のあるライフスタイルを形作るものなのかという、商品に関する知識や情報も流通し始めた。新聞や広告、チラシや名刺などによって

そのような上は伝達されたが、なかでもオークション開催に際して新聞に掲載された広告や、遺産売却のために行われたオークションのカタログなどが果たした役割は大きい。カタログの中では、売却予定の故人の私有物は邸宅のフロアプランにしたがって、リスト化され、それぞれの品がどのように使用されていたものか、想起することが容易になるように配慮されていた。消費者の嗜好は、親から子、先祖から子孫へと受け継がれただけではなく、邸宅オークションのような公共の市場を通じて、家族の外へも伝播していくことになったと大橋は考えている。

(5) 菅(研究分担者)は、緑のインテリアについて調査研究を続けてきたが、その研究の成果の一部は、草光との共著『ヨーロッパの歴史 II 植物からみるヨーロッパの歴史』にまとめられている。草光が18世紀の啓蒙主義時代までを担当したのに対し、菅はその後19-21世紀にかけて担当している。人が植物への関心からどのような集団を形成し、植物を見せる空間を生み出していったのか。植物がいかに階級を超えて「誇示的消費」の対象となっていたか。近代化、都市化とともに人々が都市空間における緑地をいかに確保しようとしてきたか。近代社会において植物に課せられるようになった多様な役割とその意味について論じている。室内に置かれた植物とそれを取り巻く室内装飾のあり方に着目しつつ、植物学あるいは園芸のなかだけではなく、室内装飾やデザインという方向からも植物が語られるようになっていった、その転換点に菅は着目している。室内における植物の消費が早かったイギリスでは、植物を着想源とした製品のデザイン化も早かった。緑地へのアクセス権やカントリーを「歩く権利」の発生から、田園都市やナショナルトラストの誕生、そして初期の環境団体の設立を経た時代に関連して、菅はその社会的・文化的意義を問い直しつつ、さらには威信やプロパガンダ、ナショナリズムといった近代的な文化価値を付与された緑の空間の創造と消費について論じている。風景は風景画として、グラフィックで量産され、都市部では「ミレニアムグリーン」という新たな緑地も創造され、緑の空間は「ヘリテージ」としての意味を付与されていった。菅の関心事は19世紀から20世紀にかけての複合的な意味での緑の「デザイン化」にあるといえよう。“ヴィクトリア朝のデザインにみる「自然の模倣」製品、庭園、人造植物”では、製品デザイン、空間デザイン、そして社会的関係性のデザインが考案されるなかで、植物・自然が織りなし、工業化社会に突きつけてきた概念的な挑戦がいかに処理されてきたかを検討している。モダニズムの興隆期に日本のデザインの果たした役割は大きい。第2回国際シンポジウムで発表された“Plants and Japonism in Modernism: a British

Experience”では、これまでジャポニズムといえは想起されてきたようなキモノファッションや扇子による一過性の装飾的な流行とは違い、実は日本的な植物のあしらい方に注目すると、それはジャポニズムを凌駕したといわれるモダニズムに許された唯一の装飾方法を提供するものとなり、この意味でのジャポニズムは 20 世紀のデザインやアートに持続的な影響力を発揮し続けてきたといえたと論じている。ジャポニズムこそがモダニズムであるとも断言できるのは、徹底したシンプリシティを貫く中で、唯一その抑制された美を破壊することなく装飾できる生け花や盆栽の存在があったからだという。

(6) 田中(研究協力者)は効率性の概念と消費について、また美術館の制度的発展に関連して、調査研究を進めてきた。平成 26 年 9 月の国際シンポジウムでは、“A Portrait of the Travelling Aesthete: Okakura Kakuzo and the Arts and Crafts Movement”を発表している。明治期の近代国家建設の中で日本美術の制度化を進める立役者となった岡倉天心は、東京美術学校、日本美術院などを創設し、日本美術を海外に知らせるための展覧会を、たとえばボストンで開催し、英語で日本美術を解説する本(『東洋の理想』『日本の目覚め』など)を出版している。中でも、岡倉の著した『茶の本』は、影響力が大きかった。ヨーロッパではアールヌヴォー運動やアーツアンドクラフツ運動が起きていたが、岡倉はラスキンやモリスの著作を読んでいた。岡倉の『茶の本』は、同様にアーツアンドクラフツ運動の影響を受けていたフランク・ロイド・ライトに絶賛される。田中は、これら東西の文化的関連性に注目し、民芸にも通じるモノの文脈で、国際的な耽美主義の広がりを論じる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 12 件)

新井潤美，“Pride and Prejudice and the Concept of ‘Culture’ in Japan”，English Literature and Language, vol. 50, pp. 47-53 (2015), 査読無.

眞嶋史叙，“Consumption and the constitution of age: Expenditure patterns on clothing, hair and cosmetics among post-war ‘baby boomers’” with Julia Twigg, Journal of Aging Studies, vol. 30, pp. 23-32 (2014), 査読有.

草光俊雄，“人文主義者ピーター・パーク”，思想, vol. 1074, pp. 85-102 (2013), 査読無.

草光俊雄，“メアリ・ウルストンクラフト女性解放運動の先駆者”，新訂 歴史と人間, pp. 169-183 (2014), 査読無.

草光俊雄，“ラスキンとモリス 中世主義と近代”，新訂 歴史と人間, pp. 184-194 (2014), 査読無.

草光俊雄，“書評 The Last Pre-Raphaelite: Edward Burne-Jones and the Victorian Imagination by Fiona MacCarthy, Faber and Faber, 2011”，ラスキン文庫たより, vol. 68, pp. 19-21 (2014), 査読無.

菅靖子，“ヴィクトリア朝のデザインにみる「自然の模倣」製品、庭園、人造植物”，ロンドン アートとテクノロジー, pp. 177-195 (2014), 査読無.

眞嶋史叙，“ファッションとロンドン 技術革新がもたらしたドレスシルエットの変遷”，ロンドン アートとテクノロジー, pp. 369-387-195 (2014), 査読無.

草光俊雄，“近代イギリスにおける「古代」と「中世」”，講演会記録 文化・思想の諸断面, pp.75-83 (2013), 査読無.

新井潤美，“バーバラ・ピムと「古き良きイギリス」”，第二次世界大戦後のイギリス小説 ベケットからウィンターソンまで, 中央大学出版部, pp. 53-72 (2013), 査読無.

大橋里見，“Auctioneers in Provincial Towns in England and Wales at the End of the Eighteenth Century”，史苑, vol. 73, pp.198-175 (2013), 査読有.

田中裕介，“書評 川端康雄著『葉蘭をめぐる冒険 イギリス文化・文学論』”，ラスキン文庫たより, vol. 65, pp. 14-15 (2013), 査読無.

[学会発表](計 20 件)

新井潤美，“イギリスの音楽劇 サヴォイ・オペラからミュージカルへ”，イギリス文化に親しむ会 第 292 回, 2015 年 03 月 15 日, 東京.

草光俊雄，“Travels, the Enlightenment and Races”，History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014 年 09 月 04 日, 学習院大学.

眞嶋史叙，“Voyage, Vanity and Vestiture”，History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014 年 09 月 04 日, 学習院大学.

大橋里見，“Passing on One’s Taste in Life: The roles and effects of general auctions in spreading noble lifestyle in England in the eighteenth century”，History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014 年 09 月 05 日, 学習院大学.

菅靖子，“Plants and Japonisme in Modernism: a British experience”，History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014 年 09 月 05 日, 学習院大学.

田中裕介，“A Portrait of the Travelling Aesthete: Okakura Kakuzo and the politics of oriental art”，History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014

年 09 月 05 日, 学習院大学.

新井潤美, “Travel and Comic Writing: Jerome K. Jerome’s ‘Three Men in a Boat’”, History of Consumer Cultures 2014 Conference, 2014 年 09 月 05 日, 学習院大学.

新井潤美, “イギリスのカントリー・ハウス観光と文学”, 松山大学英語圏文化文学研究会 第 5 回大会, 2014 年 12 月 05 日, 松山大学.

新井潤美, “不機嫌なメアリー・ポピンズ”, イギリス文化に親しむ会 第 286 回, 2014 年 07 月 20 日, 東京.

眞嶋史叙, “ボディとグローバル経済 - - なにがファッションを動かしてきたか”, イギリス女性史研究会 (招待講演), 2013 年 12 月 01 日, 麗澤大学.

草光俊雄, “The Origins of Multiculturalism: Enlightenment and Race (基調報告)”, 第 5 回 韓日ブリテン史会議 (招待講演), 2013 年 06 月 21 日, 韓国・釜山.

草光俊雄, “啓蒙主義、博物学、人種”, 第 5 1 回日本女子大学史学研究会大会 (招待講演), 2013 年 11 月 30 日, 日本女子大学.

新井潤美, “Pride and Prejudice and the Concept of ‘culture’ in Japan”, Pride and Prejudice Conference (招待講演), 2013 年 06 月 21 日, ケンブリッジ大学.

新井潤美, “イギリス文化と使用人”, 第 277 回イギリス文化に親しむ会 (招待講演), 2013 年 9 月 15 日, 東京.

新井潤美, “19 世紀イギリスにおける「ミンストレル・ショー」”, 日本比較文学会東京支部 9 月例会 (招待講演), 2013 年 9 月 21 日, 東京.

新井潤美, “サッチャーとイギリス文化”, かまくら男女共同参画フォーラム 共に生きる未来 (招待講演), 2013 年 9 月 23 日, 鎌倉.

新井潤美, “映像は Dumbing Down か 文学作品とアダプテーション”, 日本英文学会東北支部第 68 回大会特別シンポジウム「英文学教育における映像の文法」(招待講演), 2013 年 11 月 24 日, 仙台.

新井潤美, “サヴォイ・オペラと階級意識”, ミドルブラウ研究会 (招待講演), 2013 年 12 月 7 日, 東京.

新井潤美, “イギリス文化と学校教育”, 川村英文学会 2012 年度大会, 2012 年 09 月 29 日, 川村学園女子大学.

田中裕介, “律法の言語空間 『サロメ』の上演禁止再考”, 日本ワイルド協会, 2012 年 12 月 01 日, 慶應義塾大学.

〔図書〕(計 7 件)

新広記 / 田中裕介 / 眞嶋史叙 (編著) Moving Around: People, Things and Practices in Consumer Culture, Forum for History of Consumer Culture, 全 191 頁 (眞嶋 pp. 85-92, 草光 pp. 7-16, 大橋 pp.

103-10, 菅 pp. 117-22, 田中 pp. 145-50, 新井 pp. 159-64)(2015).

草光俊雄 / 甚野尚志 (編著), ヨーロッパの歴史 I ヨーロッパ史の視点と方法, 放送大学教育振興会, 全 250 頁 (草光 pp. 3-5, 11-25, 178-250) (2015).

草光俊雄 / 菅靖子 (編著), ヨーロッパの歴史 II 植物からみるヨーロッパの歴史, 放送大学教育振興会, 全 250 頁 (草光 pp. 3-5, 11-104, 125-37, 菅 pp. 138-250) (2015).

新井潤美 (監修), おだまり ローズ 子爵夫人付きメイドの回想, 白水社, 全 362 頁 (2015).

草光俊雄 / 眞嶋史叙 (監修), 欲望と消費の系譜 (シリーズ消費文化史), NTT 出版社, 全 179 頁 (眞嶋 pp.164-70, 草光 pp.1-22), (2014).

草光俊雄 / 北川勝彦 (編著), アフリカ世界の歴史と文化 ヨーロッパ世界との関わり, 放送大学教育振興会, 全 279 頁 (2013).

菅靖子, The Reimann School: A Design Diaspora, Artmonsky Arts, London, 全 97 頁 (2013).

〔その他〕

ホームページ:

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20070019/HCC2014Programme.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

眞嶋 史叙 (MAJIMA Shinobu)  
学習院大学・経済学部・教授  
研究者番号: 90453498

### (2) 研究分担者

草光 俊雄 (KUSAMITSU Toshio)  
放送大学・教養学部・教授  
研究者番号: 90225136

新井 潤美 (ARAI Megumi)  
上智大学・文学部・教授  
研究者番号: 70222726

大橋 里見 (HASHI Satomi)  
専修大学・文学部・兼任講師  
研究者番号: 40535598

井田 靖子 (菅靖子) (SUGA Yasuko)  
津田塾大学・学芸学部・准教授  
研究者番号: 20312910

田中 裕介 (TANAKA Yusuke)  
青山学院大学・文学部・准教授  
研究者番号: 00635740